

# ラジオナースについて

極限までそぎ落とされた、抽象一歩手前の人間の頭部は、ラジオナースと呼ばれる一種のスピーカーである。ガーディアン・イヤーと称されるいわゆるマイクとペアで使われる(図1)。

ガーディアン・イヤーが拾った声を電波に変えて飛ばし、それをラジオナースが受信して流すという仕組みだ。この装置は、アメリカを代表するラジオメーカーのひとつゼニス社の製品であり、発注したのは、このゼニス社の社長であると伝えられている。

大西洋単独無着陸飛行に成功したリンドバーグの幼い子供が誘拐された事件(1932年)を聞き心配した社長が、幼い娘の声を離れたヨットの上面でも聴きたいという発想から依頼したとされる。まことしやかに伝えられるこの誕生のエピソードの真偽のほどは不詳である。ラジオナースの宣伝には、年老いた婦人がベッドサイドにラジオナースを置いたイメージが使われていたとも伝えられる。とすれば、かならずしも子供の声を聴くためのものではなかったことになるし、ラジオナースというネーミングには、こちらの方がふさわしいかもしれない。いずれにしても、この製品が電波を用いて声を飛ばす装置として、ラジオの技術がさまざまに工夫・改良されていた時期の産物であったことがわかるだろう。

このラジオナースをデザインしたのは、イサム・ノグチ(1904-88)である。彫刻家であり、さらに、家具や照明器具からパブリックアート、さらには公園の計画にいたるまで、幅広い造形作品を残したノグチは、詩人で英文学者の野口米次郎と作

家のレオニー・ギルモアのあいだに生まれた。早くから造形に興味を示したノグチは、日本からニューヨークに渡り、コロンビア大学医学部に通うかたわらレオナルド・ダ・ヴィンチ美術学校に学び、やがて、周囲の勧めもあり造形作家としての道を進むことになる。

写実的な肖像彫刻をつくっていたノグチの造形に転機を

与えたのは、1926年に見たブランクーシの個展であった。具象から抽象へと作風を展開していたブランクーシに師事したノグチもまた、写実的な彫刻から抽象的なオブジェの制作へと転向することになる。

そして、1937年(あるいは38年)に製作されたこのラジオナースは、ノグチが手がけた最初の量産品として知られている。

このラジオナースの造形には、ふたつの起源があると言われる。それは、日本の剣道の面とマシンエイジの造形だ。剣道の面は、

ノグチのなかに流れる日本人の血を、マシンエイジの造形は、ノグチが生きた時代を示している。

実際、ノグチは少年時代に剣道をやっていたことがわかっている。その点では、剣道の面との連想は当を得ているだろう。さらに、日本人の血という点から言えば、たとえば、平安時代の源氏物語絵巻などに見られる引目鉤鼻の技法との連想も可能だ。特定の人物に限定されない引目鉤鼻の、顔に付随するさまざまな要素を極端にそぎ落とし、単純化した表現は、ラジオナースの造形に通じる。量産品としてのラジオナースのあり方と、絵巻のなかの男女を描く引目鉤鼻とのほのかな



図1

脈絡を想定するのもおもしろいかもしれない。

一方で、マシンエイジの造形という点でまずあげるべきはベークライトという素材である。現在はプラスチックと総称される素材であり、20世紀前半のこの時期、ラジオや電話などさまざまなプロダクト製品に用いられるようになっていた。ラジオに関して言えば、木製のラジオがベークライト製にとってかわられたのが、まさに、1930年代であり、当初は型の成形に費用がかかりすぎるとして敬遠されていたが、その軽さや色彩への可能性という点が注目され、この時代を代表する素材となった。ベークライトを用いたラジオナースの造形は、この時期の自動車や自動車のフロントに通じるもので、速度感や力強さを求めた時代の感覚を示している。なお、このラジオナースの色調は、ゼニス社のベークライト製ラジオに多く見られるものである。

しかし、日本人の血とマシンエイジの造形感覚に加えて、この時期に「眠れるミューズ」(1908年頃から)や「ボガニー嬢」(1912年頃から)などの連作で、抽象化した頭部をさまざまに造形していたブランクーシの作品も、ノグチの発想の源になったと考えてよいだろう。以後のノグチの作品を見てもわかるように、曲線による単純化された造形は、20世紀前半の彫刻のひとつの大きな潮流であった。

ラジオナースは正確にはラジオではないし、もちろんナースでもない。しかし、この作品(製品)は、ラジオを語る際にしばしば言及される。そして、それ以上に、近代から現代にかけて

のデザイン史を記述するとき、かならずと言ってよいほどに登場する。それだけ、このラジオナースが、プロダクトデザインとして、ユニークで時代を象徴する造形であると言うことができるだろう。近現代のエポックメイキングなデザイン作品を収蔵し、継続的に展示しているニューヨーク近代美術館にも、このラジオナースは展示されている(図2)。このことが、この作品のデザイン史上の位置を如実に示している。

京都工芸繊維大学では、2010年に、詩人の谷川俊太郎氏から、谷川氏が長年にわたり収集されてきたラジオ190点とラジオ関連書籍の寄贈を受けた。ラジオナースをはじめとする190点のラジオは、20世紀のはじめから後半までのアメリカを中心とした、おもに海外の製品で、この時期のデザイン史を語るうえで貴重な作品群である。軍事目的から開発されたラジオの技術は、この時期、一家に一台の



図2

ファミリーユースからさらに一人一台のパーソナルユースへと展開している。それは、技術の進歩と同時にデザインの変化をも意味している。そして、そのために、これらのラジオは、科学と芸術の出会いを求める本学にとって、教育研究上、重要な資料なのである。

これらのラジオ類は、図書館に常設展示コーナーを設け、また、一部は美術工芸資料館にも展示している。このコーナーでも、適宜その魅力を紹介していきたい。

美術工芸資料館：並木誠士  
文化遺産教育研究センター：和田積希